京都大学	博士(文学)	氏名	安　田　章　紀
論文題目	ロンチェンパのニンティク思想		

（論文内容の要旨）

本論文『ロンチェンパのニンティク思想』は、チベット仏教４大宗派の１つ、ニンマ派（rNying ma pa）を代表する学僧であるロンチェン・ラプジャムパ（Klong chen Rab ’byams pa, 1308-1363、以下ロンチェンパ）の思想を主題とする。ロンチェンパの思想体系は多岐にわたる巨大なものであるが、その核心は「ニンティク」（sNying thig、「精髄」を意味する）と呼ばれる。本論文の目的は、この「ニンティク」思想の全貌を解明することであり、以下の8つの章立てによって構成されている。

第１章【序】は、ニンティク思想の内容そのものを主題とする第２章以降への導入部分であり、ニンティク思想成立の歴史的背景や、関連文献群について主に解説する。まず、ロンチェンパが属するニンマ派の歴史とロンチェンパの生涯を簡単に述べる。続いてニンティク成立の歴史的過程を論じ、ニンティクをロンチェンパが自らの思想体系のうちに如何に位置づけているかを具体的に論じる。そして、ニンティク思想に関するロンチェンパの著作群と、ロンチェンパが自己のニンティク思想を形成するにあたって影響を受けた主要な３つの文献群、すなわち「17タントラ」（rGyud bcu bdun）、『ビマ・ニンティク』（*Bi ma snying thig*）、『カンド・ニンティク』（*mKha’ ’gro snying thig*）について紹介する。

次いで第２章から第８章まで、ロンチェンパのニンティク思想の内容そのものを主題ごとに論じていく。

まず、第２章【根基】では、ロンチェンパのニンティク思想全体の根幹となる重要概念「根基」（gzhi）について論じる。「根基」とは、悟りの世界としての涅槃、迷いの世界としての輪廻という２つの世界に先立って存在し、それらを生み出す根源的存在である。これは「本体」（ngo bo）、「本性」（rang bzhin）、「慈悲」（thugs rje）という３つのありようが不可分一体に結び付いて形作られている。まず総体としての「根基」について叙述し、続いて３側面を個別に取り上げて論じる。

第３章【根基の顕現】では、もともと自己完結し内側に閉じていた、繭のような「根基」の外郭が破損し、根基の中身が飛び出して外側へと漸次的に展開していく過程である「根基の顕現」（gzhi snang）について論じる。まず根基の外廓が破れる決定的瞬間の状況について述べた後、「根基の顕現」として繰り広げられる多種多様な現象を段階ごとに見ていく。

第４章【仏陀の世界】では、まず「普賢」（Kun tu bzang po）について論じる。「普賢」とは１番はじめに出現した原初の仏陀であると同時にあらゆる仏陀の本質とさ

れる存在であり、彼の出現こそが悟りの世界である「仏陀の世界」の開始を告げるのである。その普賢がそもそもどのようにして出現したのか、そしてどのような性質、様態を持っているのかについて検討し、普賢を含む一切の仏陀に共通する存在様態としての「法身」、「受用身」、「化身」という３つの仏身について個別に詳述する。

続く第５章【有情の世界】では、仏陀の世界と並んで「根基の顕現」から展開するが、それとは対蹠的な、有情が織り成す迷いの世界について論じる。まず、「根基の顕現」においてそもそも迷乱がどのように生じるかについて述べ、有情の世界の根本的構成要素である元素の生成過程、ならびに各元素の性質と分類方法について検討する。そして、普賢が出現してから我々が住むとされる「娑婆世界」が誕生するまでの過程、娑婆世界が属している長大な時間的単位「大梵劫」とその設置者である「持金剛」（rDo rje ’chang）、娑婆世界が占めている空間的な位置とその周辺の諸世界について述べることによって、娑婆世界の来歴や背景、位置付けについて明らかにする。そして、娑婆世界そのものの歴史を形成、変遷、衰退、滅亡という４つの時期に区切って記述する。

次にニンティクの立場では、人間存在がどのように捉えられているかという問題を扱う。まず人間の特殊性として、六趣の有情の中で最高位を占め、なおかつ輪廻と涅槃の一切の存在を包含していると考えられていることを指摘し、人間が胎児として孕まれて生まれ出る過程や、人体の構成要素である血液や肉や骨、さらに根本的な要素としての元素の性質や機能や種類などについて述べる。また、ニンティクの身体論における重要な身体組織として、体内を走る「脈」（rtsa, nāḍī）、脈組織が分厚く発達して傘のような形状になっている「チャクラ」（cakra, ’khor lo）、さらに心臓と脳についても詳述する。最後に身体と並ぶ人間のもう１つの側面である精神についても、「智慧」（ye shes）と「心」（sems）という２つの様態に分けてニンティクの見解を論じる。

第６章【灌頂】では、ニンティクの修行道を歩むのに先立って、その入門儀礼として不可欠な「灌頂」が主題である。まず、灌頂の授け手であると同時に修行道全体の指南者でもある師匠と、灌頂の受け手である弟子がそれぞれ具備しておくべき資格、資質について述べる。次いでニンティクの灌頂儀礼そのものを、「有戯論灌頂」（spros bcas dbang）、「無戯論灌頂」（spros med dbang）、「極無戯論灌頂」（shin tu spros med dbang）、「超無戯論灌頂」（rab tu spros med dbang）という４段階に分けて詳説する。各灌頂について、①灌頂を受けるに際しての時間、場所、人数などの前提条件、②儀礼の詳細な式次第、③式次第を構成する諸要素の分類、④灌頂から得られる種々の果報、という４項目を立てて考察する。また修行道を歩む過程で厳守すべきニンティク独自の三昧耶についても、種類と果報などを論述する。

第７章【修行の過程】は、ニンティクの修道論を主題とする。修行道は準備段階と核心部分の２つに分けられる。準備段階は「身の訓練」、「口の訓練」、「意の訓練」とい

う３つの部分から成っている。このうち、「身の訓練」とは、法身、受用身、化身という仏陀の三身にまつわる３つの「座り方」（bzhugs stangs）の学習である。「口の訓練」とは沈黙の学習である。「意の訓練」とは分別を起さないようにしたり、心の観察に努めることである。一方、核心部分については、「テクチュ」（khregs chod、硬いものの切断）と「トゥゲル」（thod rgal、跳躍）の２つに分けられる。「テクチュ」は、哲学的見解として否定的一元論を有し、見解の習得手段としては「自然体」や「くつろぎ」といった独特の方法を持っている。一方、「トゥゲル」は準備段階としての目および息風の訓練と、それらの訓練を通して得られる神秘的体験としての「４顕現」（snang ba bzhi）という２つの部分に分けられる。このうち、目の訓練では、法身、受用身、化身という仏陀の三身にまつわる３つの「御覧になり方」（gzigs stangs）を身に付け、息風の訓練では呼吸の種々の制御法を学ぶ。両者とも最終的に「４顕現」を現出させ、増幅させることを目的としている。トゥゲルひいてはニンティクの修行道の最終局面である「４顕現」とは、もともと心臓をはじめとする体内の各部分に存在していた「光明」（'od gsal）を両目を出口として体外に現出し、段階的に増幅させるとともに、内面においても深遠な空性の智慧を獲得していく過程である。「４顕現」のうち、１番目の「存在自体が目の当たりになる顕現」（chos nyid mngon sum gyi snang ba）では、体外に出現した光明を初めて目の当たりにする。２番目の「体験が増幅する顕現」（nyams gong 'phel gyi snang ba）では、眼前に出現した光明が膨張し、巨大化、複雑化していく。３番目の「叡智が極点に達する顕現」（rig pa tshad phebs kyi snang ba）では、光明がさらに発達して極限に達し、人体を含めた万象が光明化するに至る。４番目の「存在自体が尽き果てる顕現」（chos nyid zad pa'i snang ba）では、極大化した光明が一転して衰滅し、遂には消えてなくなるという、正覚の一歩手前の体験である。これら４つの顕現の性質、機能、体験者への影響などについて詳述する。

最後の第８章【死】では、人間の死に関するロンチェンパのニンティクの見解、対処法、儀式などを整理して提示する。まず、死期を知らせる死相の種類とその解読法、種々の呪術的延命法や、死が目前に迫ってきた時の処し方について記述する。また、臨終の段階で起こる出来事としての、身体を構成する元素が漸次的に融解していく過程や、来世の運命を予示する兆候の現われなどと、「ポワ」（'pho ba）を始めとする臨終独特の解脱の試みについて記述する。続いて死んでから転生するまでの中間段階である中有を取り上げる。ニンティクにおいて、中有は「存在自体の中有」（chos nyid bar do）と「迷える生存の中有」（srid pa bar do）の２種類に分けられる。前者は「４顕現」と同様、体内に潜んでいた光明が体外に抜け出し、死者の眼前で複雑に展開するものであるが、その光明を自己自身と認知することによって解脱が可能となる。もし認知に失敗すれば「迷える生存の中有」の段階に移行し、再生への道を歩むことになる。これら２種類の中有の様相、性質、役割などについて詳細な解説を加える。

次に、死者が中有における解脱に成功した場合に残す特殊な遺骨や、光や地震などの奇跡についてロンチェンパが述べるところを整理し、最後に、死者の救済を目的とする３つの儀式、すなわち「死体浄化の儀式」、「火葬の儀式」、「週ごとの法要」を取り上げ、それぞれの式次第を詳述する。

以上、第２章【根基】から第８章【死】に至る全７章のうち、第２章から第５章までがニンティクの存在論的側面、第６章から第８章までがニンティクの救済論的側面を扱っており、両者相俟ってロンチェンパのニンティクの全体像を明らかにしている。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、14 世紀のチベット仏教ニンマ派の巨匠ロンチェンパ（1308-1363）の「ニンティク」と呼ばれる思想を解明したものである。ニンマ派はチベット仏教の四大学派（他の三派は、サキャ派、ゲルク派、カギュ派）の一つであり、古派又は赤帽派と呼ばれることもある。一般にチベット仏教に於いては、その派の中からダライラマを輩出し、ダライ五世の時にダライラマ政権を確立し（1642 年）、政治と宗教の権力を一手に掌握するに至るゲルク派のみが目立ち、他の宗派は消滅してしまったかのような印象を与えるが、実際には各派は現在に至るまで各々の伝統を保持しつつ存続している。特にニンマ派は、他の三派の出現がいづれも仏教後期伝播期（10 世紀以降）であるのに対して、仏教前期伝播期（843 年以前）にインドからチベットへ仏教を伝えたインド論師 Padmasambhava を祖師と仰ぎ、自らの伝統が前伝期より継承されたものである点に高い自負を持っている。チベット人にチベット仏教を代表する学者を挙げるようにと言うと、「サ・ロン・ツォンの三」（Sa Klong Tshong gsum）と答える。つまり、サキャ派のサキャパンディタ、ニンマ派のロンチェンパ、ゲルク派のツォンカパの三人である。このようにロンチェンパは、ニンマ派ばかりでなくチベット仏教全体にとっても非常に重要な人物なのである。

「ニンティク」とは「心髄の滴」という程の意味で教義の枢要中の枢要を意味している。ニンマ派では教義のレベルを九段階に分けて、声聞乗、独覚乗、菩薩乗、クリヤー乗、ウパヤ乗、ヨーガ乗、マハーヨーガ乗、アヌヨーガ乗、アティヨーガ乗、という九乗の教判を立てる。その最上の段階であるアティヨーガ乗はゾクチェン（大究竟）思想とも呼ばれるが、この乗はさらに心部（sems sde）、界部（klong sde）、教誡部（man ngag sde）の三段階に分けられ、最上の教誡部もさらに細部の多数の段階に分けられるのであるが、その最上位の「無上秘密部類」（gsang ba bla na med pa'i skor）と呼ばれているものこそがニンティクなのである。つまりゾクチェン思想の枢要の枢要がニンティクであるということが出来る。「ロンチェン・ニンティク」という言葉は非常に有名で、チベット学研究者ならほとんど誰でも知っている。しかし、その内容の全体を正確に説明出来る人は皆無と言ってもよい。それは彼の著作が非常に大部なものである上に、内容が密教思想の極めて難解なものであるため従来十分に解明されなかったためであるが、本論文によりようやくその詳細が明らかにされることになった。

論者は第一章（序）に於いて、ロンチェンパが彼のニンティク思想を形成するための基盤となった三種の文献群を先ず整理し紹介している。第一に、「17 のタントラ」と呼ばれる『古タントラ全集』（rNying ma rgyud 'bum）中に含まれる 17 種の密教経典、第二に、『ビマ・ニンティク』と呼ばれる、8-9 世紀にチベットがインドから仏教を導入する初期の段階で大きな役割を果たしたインド僧 Vimalamitra に由来するとされる文献群、第三に、『カンド・ニンティク』と呼ばれる、「カンドマ」（mkha' 'gro

ma）つまり、インド伝来の女神であり仏教の守護神となる空行母（ḍākiṇī）に関する成就法、呪術、供養儀礼、讃歌などを多く含む文献群、である。次に、論者がロンチェンパの思想そのものを詳述する際に用いた主要文献は五種ある。先ず、「7つの宝蔵」と通称される彼の著作の七部作（mDzod bdun）のうちのニンティクを主題としている『最勝乗の宝蔵』（Theg mchog mdzod）および『語義の宝蔵』（Tshig don mdzod）の二大著、さらに、ロンチェンパが『ビマ・ニンティク』に基づいて著作した、ニンティクの実践面について詳しい大小の文献群から成る『ラマ・ヤンティク』（Bla ma yang tig、『ラマの真骨頂』）、『カンド・ニンティク』に基づいて彼が著作した『カンド・ヤンティク』（mKha' 'gro yang tig）、最後に『ビマ・ニンティク』と『カンド・ニンティク』の双方に関係する著作『サプモ・ヤンティク』（Zab mo yang tig、『深遠の真骨頂』）の五点である。論者はこれら五点のロンチェンパの著作を中心に、さらに文献表で四頁半に及ぶその他のチベット蔵外文献を援用して、第2章以下第8章までの七章に次のようなトピックを配してロンチェンパのニンティク思想の内容を明快に詳述することに成功している。第2章：根基、第3章：根基の顕現、第4章：仏陀の世界、第5章：有情の世界、第6章：灌頂、第7章：修行の過程、第8章：死。（内容の要約は要旨部分参照）。論述は、脚注にチベット語原典を示しつつ本論中に原典の翻訳を提示した上で、その都度分析と統合を行って結論を得るという形で進められており、読者としてはやや読みにくい感があるが、難解な思想を原典に即して正確に実証的に論述している点は信頼に値する。かくして本論は9ポイントの小さな活字で書かれたA4版350頁にも及ぶ大著となっている。

本論の最大の功績は、従来断片的或は部分的にしか明らかにされていなかった、ロンチェンパのニンティク思想の全体を明らかにした点にあり、チベット仏教研究史上大きな貢献である。論者が用いたチベット語原典はいづれも非常に難解なものである。それに明快で正確な説得力のある解釈を与えることが出来たのは、偏に長年に亘って密教文献の読解に専念し習熟してきた論者の研鑽の成果である。論者は修士論文としてロンチェンパの顕教の大著『宗義の宝蔵』（Grub mtha' mdzod）について優れた論文を提出した。博士課程進学後は、専ら、ロンチェンパの密教の著作並びにその他の密教文献を読破することに専念した。また、独立行政法人日本学生支援機構の短期留学推進制度の奨学金を得て一年間ドイツへ留学し、ニンマ派思想の世界的権威であるミュンヘン大学のフランツカール・エールハルト教授（Prof. Dr. Franz-Karl Ehrhard）の下で『最勝乗の宝蔵』の特に難解な部分を精読する機会を得て、その内容を徹底している。本論は、そのような論者にして初めて可能となった業績である。

しかしながら、ロンチェンパのニンティク思想の全体を正確に取り出したという点ではほぼ完璧といえる本論にも問題がないわけではない。例えば、この思想はその後ニンマ派の中でどういう役割を演じたのか、また、チベット仏教史全体の流れの中ではどういう評価を得たのか、どういう批判があり、それに対してどのように答えたの

か、という歴史的な考証が全く為されていないのは惜しまれる。また、ロンチェンパの思想の中にはニンマ派特有の考え方や用語が多くみられる反面、インド・チベット仏教の顕教文献で用いられているものと類似の用語も散見されるため、既存の用語とニンマ派で用いられる用語との比較考証をもう少し厳密に行うべきであった。例えば、ニンティクの修道論の最終段階で用いられる「テクチュ」（khregs chod、硬いものの切断）と「トゥゲル」（thod rgal、跳躍）の二つの修法のうち、「テクチュ」は確かに他の文献に見られないニンマ派固有の用語のようであるが、「トゥゲル」については、顕教文献に類似の表現で現れる「超越三昧」（トゥギェル、thod rgyal, vyutkrāntaka-samāpatti）との関係について一言あるべきであった。また、本論は膨大な量のチベット文献を駆使しての論述を簡素化するために略号を多用して議論を展開しているが、略号が文献表に無いことがままあり、また、略号がチベット文献表の中に混在していて容易には見出せないという難点があり、共に改善が必要である。しかし最後の点は少しの努力ですぐに解決できる類のものであり、最初の二点もむしろ論者の今後の研究に期待すべきものであり、本論の価値を著しく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年2月5日、調査委員3名が、論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。